

## 【一般演題2】 第9席

## 『甲乙経』における穴の主治證の研究・第3報

東京 篠原 孝市

病態を解消するために鍼灸が探ることのできる態度は、選経・選穴・手技・手法に限られる。特に選穴問題は鍼灸実践上の核心的課題というべきもので、古来、選穴に関する論は多い。『難経』の六十九難や金元以降の八穴の法などはその一端を示すものである。このような選穴法は簡便であるから、現在も広く用いられている。ただし手足の要穴のみが対象であったり、五行的な観点からの選定に限定されているなど、『甲乙経』以来の300余穴に適応さるべき選穴法則とはなっていない点に問題がある。

これらの定式化の試みとは別に、選穴の基準となるのが、穴の主治證である。各穴に記載される主治證の内容は時代と共に変遷するが、これは各穴の選穴基準を時代に応じて臨床的に変化させたということであり、各時代の病證把握と治療の様相を窺わせる絶好の材料となっている。そして『甲乙経』の主治證及びこれに深く関連する隋唐諸資料（『明堂』系統の資料）は現在までのところ、まとまった主治證の記述としては最も号い内容を伝えるものである。

既報においては、先ず『甲乙経』と仁和寺本『黄帝内経明堂』『外台秘要方』などの主治證関連諸部分を比較し、唐以前の『明堂』系統の主治證を考えるうえにおいては、『甲乙経』を根底におくべきことを主張した。ついで諸資料が揃っている肺経部分の主治證の解析を行い、記述を構成する個々の病註がどのように配列されているかという問題につき検討した。

今回の報告では、前回に引き続いて主治證の記述についてさらに検討を加え、記述の構造的な一端を明らかにする。